

春を祝う

夏から冬、そして春。三岸節子は日本で、また20年以上の月日を過ごしたヨーロッパで、移ろいゆく季節の変化を楽しみ、絵に描いてきました。風景画家として開花する以前の作品から、四季を描いた風景画、鮮やかに咲き誇る花の作品までを展覧し、春の訪れを祝います。また、夫の三岸好太郎、息子の三岸黄太郎の風景画を展示し、三者の異なった趣きを探ります。

■静物画に見る花と壺

「私は壺が大好きである。花を挿してよし、アトリエに並べて静物の材料としてよし、棚の上、机上、あらゆる所種々雑多な壺を置く。縄文、はにわから、朝鮮、中国の新古さまざま、クリスタルの壺、ローマングラス泪壺、土中深く眠っていた何千年前の壺に、これからほこりを払って花を挿してみよう。」^(注1)

画業の初期は家事と育児に忙しく、また脚の持病もあって家の中で静物画を中心制作していました。その中でも、節子が好んだのが花のモチーフです。花は、初期の室内画・静物画のモチーフの内のひとつとして登場し、次第に単体で描かれるようになっていきました。赤や白の絵の具を盛り上げて描かれた、生命力あふれる花の作品は、後に節子作品の代名詞ともなっていきます。冒頭の言葉からは、さまざまな花瓶や壺と組み合わせて、花を活ける時点から画家の楽しみが始まっていたことが伝わってきます。



《花と魚》1952年 ©MIGISHI



■心の中の風景を描く

節子がかねてより強く憧れていたフランスへと旅立つことを決意したのは、1954(昭和29)年、49歳のときでした。息子の黄太郎とともにフランスやイタリアを巡り、風景画という新しいテーマに取り組み始めます。帰国後の節子は、絵を描くことだけに集中したいという思いを募らせていく、1957(昭和32)年からは軽井沢の山荘にこもって制作に没頭しました。そんな孤独との葛藤の中から生み出されたのが「火の鳥」シリーズです。激しく燃える火の中で身を焦がしながら飛ぶ鳥は、苦しみにもがく作者の姿が投影されており、当時の節子の心象風景ともいえる作品です。その後、1964(昭和39)年に神奈川県大磯のアトリエに移ってからは、海の見える明るい景色から発想を得て、風景画の制作に意欲を燃やしました。

《飛ぶ鳥(火の山にて)》1962年 ©MIGISHI

■好太郎・黄太郎と風景画

節子の夫、三岸好太郎も風景画を残しています。短い生涯の中で目まぐるしく様式が変化した画家の、写実に根ざした作品が当館に収蔵されています。好太郎が《風景》を描いた1931(昭和6)年頃、日本の洋画界は大きな変革の中にありました。前年の1930(昭和5)年に、「既存の団体からの絶縁・新時代の美術の確立」を宣言して独立美術協会が成立、好太郎はその創立メンバーとして中心的な役割を担っていました。独立美術協会は、その自由な気風から当時の若手画家の絶大な支持を集め、短期間の内に既存団体を脅かす存在にまで急成長していきます。同年、節子との間に長男が生まれましたが、創作と協会の活動に忙殺されていた好太郎は、その出生届を出すことも忘れてしまい、それに家族が気付いたのは1934(昭和9)年、好太郎が31歳で急逝し、その死亡届を提出しに行ったときのことでした。



三岸好太郎《風景》1931年頃 ©MIGISHI



驚いた節子は、その場で好太郎が好きだった色をとって、長男を「黄太郎」と命名します。黄太郎は4歳になっていました。高校時代より画家を志した黄太郎は、23歳のときにフランスへ留学、翌年母節子を呼び寄せてヨーロッパ中を巡りました。1968(昭和43)年、黄太郎は節子ら家族とともにフランスのカーニュに移住、後にヴェロンに拠点を移し、ヨーロッパでの生活は20年以上にも及びました。その間、黄太郎は節子を車に乗せてフランス各地、イタリア、スペインなどへと取材旅行へ行きました。節子が風景画家として開花した背景には、黄太郎の献身的ともいえる下支えがあったのです。

黄太郎もまた、一人の画家として母節子とも父好太郎ともまったく作風の異なる風景画を残しています。黄太郎は、節子が戸外でスケッチをしている間、自身はほとんど描かず、アトリエに帰ってきてしばらくした後に、記憶の中の風景を探るように描き始めました。《祭りの日》は、簡潔な構図の中に、濃淡やぼかしで微妙な光の変化を表現し、繊細なタッチや引っかきが独特のマチエールをもたらしています。その画面は、時間の経過と自己の内省から生み出された、静謐さをたたえています。

三岸黄太郎《祭りの日》1982年 ©MIGISHI

(注1)三岸節子『花より花らしく』求龍堂、1977年